

目次

預言者ヨナの物語	1
--------------------	---

預言者ヨナの物語

預言者ヨナの物語

木人形（きにんぎょう）

第1章

御神（おんかみ）エホバ アミタイの子ヨナに託して曰（いわ）く 汝（なんじ）大（おお）いなる町ニネベに急ぎ行（ゆ）きて 彼（か）の悪（あ）しき民への警鐘となるべし
その悪 我に挑みかからんとするなればなり されどヨナ エホバに逆（さか）らいてタルシシに向かう 『旧約聖書「ヨナ伝」第1章1－3節』

古い話です。イエス・キリストが生まれるよりもっと昔の話。ニネベという町がありました。今はイラクのモスルとなっており、遺跡が残っています。古代アッシリア王朝の主要都市の一つで、のちに王朝最後の首都ともなります。ヨナ伝によると、その端から端まで行くには歩いて三日もかかるほどで、町というよりは立派な国というべきで、王もいましたので都市国家でもありました。

しかし、古今東西の都市がたいいそうであるようにニネベも模範的な都市とはいえませんでした。王から下層市民にいたるまで不正、腐敗、詐欺がはびこり、権力の乱用による貧富の差も広がり、その反動として暴力集団が発生し暴動が頻発していました。しかし富と暴力は互いに親和性を有しているのです。富裕層は暴力をも配下にするようになり、かえっての富の不均衡は助長され、ついに富と暴力が正義という国家も手におえない無秩序が作り上げられていました。富に飢える武装集団は周辺地域の民族をも略奪し、その結果、近隣勢力との抗争が繰り返され、エスカレートし、敵への恐怖心と憎悪が高まり、例えばニネベでは戦争の捕虜を残酷にも生皮を剥いで処刑しました。こうしてニネベの市民は神を恐れない民となり悪名を轟かせ怖れられました。

神といってもニネベの人々にとってのそれは諸々の偶像神でした。職人の手で作られた人や動物、あるいは半人半獣の形をした神像が町のそこかしこに祭られており、裕福な

家には二つ三つの家庭守護神が祭られていました。このような偶像のおおかたはその神格の由来が曖昧で、中には人形芝居に使われていた人形がまわりまわって神様に祭り上げられることもありました。そのようなことは人に関しても起こり、ただの人がめぐりめぐって生き神様として崇められるようになることもありました。このような神々は、正義且つ全能という概念と無縁で、ちょうどギリシャ神話の神々と同じように、神も人間と同じように不義を犯すということが不思議なことでもなくなり、慈愛の概念が神から剥奪されていました。

結局、多くのニネベの人は、日々見かける偶像神や生身の神は恐れるに及ばずという意識を抱くようになりました。しかし一方、権力者たちにとって市民から富を吸い上げ続け、以て自からの権力を保全するためには神々の権威の保全が不可欠でした。そこで神への畏敬の念を抱かせるべく不可思議な神話や神から授けられたとする戒律がたくさん創作され、これらが編纂され、流布され、聖典として冒すべからざるものとされました。こうして、権力の後ろ盾により、神々の神格は絶対的なものとされ、市民は金品や農産物をそれぞれの信仰する神に奉納し、神話創作者らとその共謀者らはこれらからご利益を得ました。たとえば神殿などの神像は木製の偶像を、奉納された金や銀の品々から鋳造された箔で覆って作られることが一般的であったが、権力者たちは神々からこの金箔や銀箔を盗み、また供え物から高価なものを着服しました。彼らにとって神々は文字通り金の生（な）る木というわけでした。このようなことは古今東西共通で、その証拠には、中国には「仏様の顔から金をはぐ」（水滸伝）、日本には「仏の顔も三度まで」ということわざがあります。こうして権力階級の高位の者ほど神への信仰は低いのが実情で、さらに、彼らは、神の権威を逆用し教義を強（し）いて、弱き者らを害し、かえって、自らの良心の声を恐れる無神論者よりも不正に走りやすくなっていました。

このように権力者たちは神々を富獲得のための道具として用いていましたので、神々への不遜や冒瀆を厳しく罰する戒律を、神々から与えられたものとして絶対視させ、違法者や冒瀆者らは重刑を以て処罰されました。しかし神々を利用した権力者たちこそ神々をより冒瀆していたといえます。こうしてニネベの人々は権力者を神よりもはるかに恐れるようになっていました。

一方、権力者たちが最も恐れたのは、市民の反乱、とくに敵国との共謀による反乱でした。そこで、反乱を防止する目的で市民に恐怖心を植え付け、かつある種の野蛮な欲望を満たせしめる目的で、敵国捕虜の残忍な公開処刑が定期的に行われました。

さて、この後者の目的のためにニネベの人々は、神を恐れないにもかかわらず、神への服従を口実とした忌むべき悪習に浸るようになっていました。それは、神に人の子を生

け贄として捧げることであり、この神の名を借りた殺人こそニネベにおけるもっとも大きな罪でした。

そして、旧約聖書のヨナ伝によると、神エホバは耐えかねて劫罰を決心したが、一縷の望みをニネベに与えるべく、アミタイの子ヨナに神託を授けたのでした。しかしヨナはこれを聞きませんでした。

神託というのは、神から人へのお告げですが、王などの権力者が自らの計略として人々を行動に駆り立てるために、祭司や預言者に強要した結果の偽神託が多々あったと想像します。そうであれば、ヨナのように逃避行する預言者は珍しいことではなかったでしょう。ヨナが本当に神から逃げたのか、それとも民の悪行を正し秩序を回復しもって王家の安泰を計ろうとしたニネベ王による偽預言の強要から逃げたのか？ 筆者にはいずれの選択肢も捨てがたいものでしたが、ヨナの奇跡を鵜呑み、いや鯨飲することになりました。

神曰く「ニネベに最後のチャンスを与えよう。お前は預言者としてニネベに行って、人々に罪を悔い改めるように話しなさい。もしお前の話を聞いて悔い改めるならニネベを滅ぼさないことにする。もしそうでなければ、ニネベを抹殺する」

ヨナ「なんですって！ ニネベですか？ 何で私を・・・ご存知でしょう、私がまだ子供の頃、父と母はニネベから攻めて来た略奪者らによって私の目の前でたたき殺されたのですよ。私はそのショックで気を失い、意識が戻ると記憶をすべて失っていました。自分の手を見てどちらが右手でどちらが左手かもわからないありさまでした。家は半分壊され、大切なものはみな持っていかれました。たくさん若い男女が鎖にかけられ号泣しながら家畜のように連れ去られました。家畜もたくさん盗まれました。うちで飼っていたヤギもみな連れていかれました。私はみなしごになり、屋根のなくなった家を覆うように生（は）え出たイチジクの木がなかったら飢え死にしていたでしょう。だからあんな憎い人たちの住むニネベなんか行きたくありません。あんな汚（けが）らわしいところはすぐに滅ぼされるべきです。ニネベの悪党どもはあなたの造られた地に住む価値がありません。すぐに滅ぼしてください！ どうぞ神様、ご存知のようにこれは私がずっと願っていたことです。それなのになぜ今私をあそこに行かせようとなさるのです？」

「ニネベの民が待っている、早く行きなさい。」

「どうぞお許しを！ 私にはできない。ニネベに預言に行くのだけはご勘弁ください。・・・そうだ、神様、私よりももっとふさわしい人たちがいます。ニネベにとりことなって連

れていかれた人たちの中には預言者も何人かいると聞いています。その人たちからお選びになったらいかがでしょうか？すでにニネベにおりますから手っ取り早いし、現地の言葉も話せるようになっている者もいましょう。それにひきかえ私はニネベに行く道を知りませんし、その言葉も全く話せません。やはり私にはできない・・・他のところならどこへでも行きますから、どうかニネベだけはご勘弁を！」

「お前が最善だから決めたことだ。私は次善の者は使わない」

しかしヨナは神の言いつけを守りませんでした。ニネベとは反対の方向に逃げて行き、ヨッパという港（今のテルアビブ）に来るとそこから船に乗って地中海にいで、今のスペインあたりでしょうか、タルシシという地に逃げようと思いました。遠く水平線の果てに行ったら神から逃（のが）れられると思ったのです、人々がまだ地球は丸いということに気づいていない頃のことですから・・・ましてや回転してるなんて思いもありません。

ヨナは船底におりると、急いだ長旅の疲れのためにすぐにぐっすりと眠りこけました。しかし船が港を出てしばらくすると風向きが変わり、強い風が船を押し戻すように吹いてどんどんあらぬ方角に押しやっていきました。風は次第に激しさを増し、黒い雲が空をおおいはじめ、すぐに辺りは夕暮れのように暗くなりました。雷鳴がとどろき激しい雨も降りだしました。嵐です。波は荒れ狂い船は大きく揺れ今にも転覆してしまいそうです。

「ありや ありや ありや、大変だー、こりゃあ危ない！」 舵手

「ああ神様、助けてー！」 水夫

「急いで帆を下ろせ！ 碇（いかり）も下ろせ！」 船長が大声で叫びます。

客室にいた乗客らが甲板にびくびくしながら上がってきました。船の大揺れでろうそくの灯りがすべて消えたからです。ねずみもたくさん、彼らを追い越して甲板に上がってきて、少しでも高いところをめがけて走ります。

「みんな、自分の神様に嵐が治まるようお願いするのだ。乗客のみなさんもそれぞれの崇（あが）める神様に命乞（ご）いして下さい！」 船長

船の上の人たちはそれぞれ自分の神に助けを求めました。しかし嵐は少しも弱まらず、船はギギギー、ギギギーと、今にも真っ二つに折れてしまいそうな音を立てています。

「神さまー、神さまー、どうかお助けくださいーい！」人々は必死で叫んでいます。

「おお、わが神、偉大なるベル様、こりゃあ、あぶのうございます。どうかこらえてつかあさい！もし生きてもういっぺん御身（おんみ）のお宮に参ることがかないまするなら、必ずレバノン杉の神殿を建てて進めますけえ！」裕福な材木商人。

「あな、ゼウスの娘（むすめご）であられアポロのふたごの妹であられる麗しき女神アルテミス様、どうぞこの嵐を沈めてください。もし私がこの難を逃れて生き延びることがかないまするならば、十頭の子牛の生贄をあなた様の宮殿に捧げましょう」賭博師。

「ああ、われらの臓腑を五穀と葡萄酒で満たされる豊穡の神であられる半魚神ダゴン様、どうぞわれらの腑が塩水（しおみず）と海藻（かいそう）でふくらまされないようお助け下さい！」料理長。

「あば、エホバ神！あなた様の御名（みな）を語った数々の罪をお許してください。」偽（にせ）預言者が船尾にて人に聞かれないようひそひそ声で祈る。「誓ってもう二度と偽りの預言はいたしません、あなたの御名においても他のいかなる神の名においても。ですからどうぞこの船とともに私を海の藻屑になさいますように！あなた様もよくご存じのとおり、私がこの船に乗ったのはまさにあのニネベ王から逃れるためです。王の家来が私を見つけ無理やりニネベに連れ戻そうとしました。今度はあなたがニネベを破壊するのだという偽預言を私にさせようと思いました。しかし私はもう悔い改めました。だからすきを見て逃げ、この船に隠れたのです。ですからどうぞお許しを！あなたの名を語って得た金はみな返しますので！」

「海王様、どうぞお怒りを静めて下さい。どうぞ、お助けを！」船長がへさきにて祈る。「われらのうちに何かあなた様のお気にさわるようなことをした者がおるのでしょうか？でしたらお教え下さい。その罪を悔い改めさせますから」

「お母さん、お母さん、こわいよー、助けてー」初めて海に出た小間使いの少年船員。

「おお、パール、パール、もしこの船をどうしても沈めるのでしたら、わたくしジョジョめをイルカに変えてください」泳げない見習い料理人。

しかし嵐はいつこうにおさまらず、船は苦痛にあえぐ人のうめき声のような音をたててきしむ・・・いっそ真っ二つに折れてこの苦痛から逃れたがっているかのような・・・あるいは船も慈悲を求める祈り声をいずこかの女神に上げていたのであろうか。

こんなにたくさんいたのかと驚くほどおびただしい数のねずみたちがマストに上がって不安そうな鳴き声を上げている。ねずみを餌にしていた数匹のイタチまで現れて舳先に集まった。

水夫たちは船を少しでも軽くし且つ重心を下げるために甲板にあった大きな荷物を手当たり次第に海に投げ込みます。

さて、ヨナはそのとき船底でまだ眠りこけていました。船体のきしむ音も荒いローリングも彼を目覚めさせません。

船長が提灯（ちょうちん）を片手に降りてきました。うめき声が聞こえたので、声のほうに寄ると、寝ながらうなされているヨナを見つけ、船長は驚き恐れしました。「なんとこんな揺れをもものともせずに寝ておれるとは、まさに神わざだ！ しかしこの深い眠りさえも、何かしらおまえの現実の罪・苦悩を一時（いつとき）も忘れさせてくれないのか・・・哀れな人・・・もしやいずこの怒（いか）れる神がおまえを起こそうとしてこの災難を我が船に見舞っているのではあるまいか？・・・はて、わしはなぜ今ここにいるのだろう？・・・覚えがないぞ！・・・ありやりや！もしやこやつが神が、嵐をもものともしない強情なこいつを叩き起こさせるためにわしに憑（つ）いてここへ来（こ）させたもうたか？！」

船長はヨナの顔を平手で打って、大きな声で言いました。「これー！こんな大変なときに寝てる奴があるか！すぐにあなたの神様に嵐を静めてくれるよう祈ってくれ。あなたにも信じている神があるだろう。もしかしたら、あなたの神様がこの嵐から私たちを救ってくれるかもしれない。」

「神様？だめだ！私は祈れない・・・」ヨナ

「じゃあ、あなたには神様はいないのですか？」

「いや、いますとも、全能の神エホバです。でも私はその神様から今逃げているのです。神様を捨ててきたのです！」

「神様を捨てた？ それはどういうことです？ 聞かせてください」

「実は三日前、神様は私にニネベに行って人々に罪を悔い改めるよう話してこいと命じました。でも私にはそれは荷が重すぎたのです。それで神様に背いて逃げているのです」

「(傍白) なんと、おまえはわしの船には重すぎる荷だ！」

「だから、私にはもう神様に祈る資格なんてないのです。」

「祈る資格がない？ いやあなたは祈るべきです。あなたは神を捨ててきたと言ったが、あなたが捨てたのは神じゃなくてあなた自身です」

「(傍白) そうだ、私は、神に捨ててもらいたかったのだ！」

「それに、あなたは荷が重過ぎると言ったが、神がじかに命じられるのだからその重荷は実は軽いはず」

「その軽いはずの荷が私を金縛りにするのです。だからその荷を捨てて逃げているのです」

「まさにこの嵐は、そんなあなたへの神の怒りでしょう。でもあなたの神様はあなたを連れ戻そうとしているのだとしたら・・・さあ早く神様に祈ってください。祈って、ニネベに行くと申し上げるのです。許しを請うてください、あなたのために私たちの命まで危なくなっているのですから。あなたが祈らなければ、私は船長として、あなたの神様の手となってあなたを葬らねばならない！」

さてその頃、船の甲板では水夫長が細い棒の詰まった花瓶を持って現れ、大声で言いました「さ、みんな、このくじを一本ずつ引いてください。先が赤くなったくじが一本だけ入っています。そのくじを引き当てた人がこんな嵐を呼ぶようなひどいことをした罪人（つみびと）です。」

みんな恐る恐るくじを引き始めました。というのは、かの偽預言者同様、だれもが心当たりがあって、この嵐は自分の「あの」罪のせいに違いない、と思い始めていたからです。

「ああ、やっばしわしじゃなかったろう、ほれ、わしのくじをみんな見てつかあさい」材木商人はほっと胸をなで下ろしました。人身御供（ひとみごくう）にされる危険を知っていたからです。

「ああ、よかった。ぼくはいつもくじ運がいいから赤いやつを引き当てるかとはらはらしていたよ。でも神様はやっぱり間違いはしないもんだ、はっはっは」見習い料理人は、目に涙を浮かべながら、「パール様、パール様！」と唱え、嵐が静まるよう祈りを続けました。

「ほら、わしだってちがう、わしは無実だ・・・しかしかわいそうなわしの子、あいつは無垢（むく）の人形なのに、ならず者の船員どもが箱もろとも冷たい海に投げ捨ててしまったわい」人形使いが、目に涙を浮かべて言った。

こうしてみんなくじを一本ずつ引いていきました。しかしだれも赤いくじは引き当てませんでした。そしてくじは残りわずかとなりました。

「さあ、まだ引いてないのはだれだ。」占星術者

「私はくじを作ったので最後に引くのがきまりです」水夫長が、くじが引かれるたびにしていたように、花瓶を振ってくじ棒をカラカラいわせて混ぜました。

「ああ、そういえば船長がまだ引いていない。しばらく姿を見ないが」舵手

「それにあの最後に飛び乗ってきたけったいな旅の人もまだ引いてないぞ。」料理長

「ああ、ヨナならまだ下で眠ってますよ、ひどくうなされていて・・・おや、やっこさんやってきましたよ」拝火教徒

そのとき、ヨナが船長に支えられながら船底から上がってきました。そして大きな声で言った。「くじを引く必要はない、この嵐は私のせいであって、自分の神様の為せる技

です！」

船長はみんなにヨナが神に背いて逃げてきたことを説明し、最後の数本のくじを引き抜き、赤いくじを荒れ狂う天に差し上げて声高に言った。「私は、この人ヨナの神様に呼ばわって尋ねる。この赤いくじのために、あなたはこの無実のくじをも海中に葬るのですか？」

しかし嵐は衰えるどころか激しさを増した。

「あっ、碇綱（いかりづな）が切れた！」水夫長

みんなはヨナを取り囲んで口々に言った。

「あなたのせいで私たちは死ぬかもしれないですよ！」偽預言者

「あなたは何者だ！」拝火教徒

「あなたはどこから来た人だ！」占星術者

ヨナは答えて言った。「私はガトより来ましたヘブライ人です。私は海と地を造られた天の神エホバを恐れる者です」

「あなたはなんてことをしたのです。あなたの神様に背いて逃げようなんて！」占星術者

「おれたちまで巻き添えになるなんてごめんだぞ！」賭博師

「この嵐が静まるには、あなたをどうすればいいのだろうか？」水夫長

海はますます荒れて、大波が一つ船べりを越え入り甲板は水浸しになった。

「私を海の中に投げ入れてください。そうしたら海は静まるでしょう。私にはよくわかっています。この暴風がこの船を襲っているのは私のせいですから。」ヨナは死を覚悟した。

しかし船員らは何とか船を陸のほうに漕ぎ戻そうと努めた。そのころは船は必ず陸が見えるところを航行していましたから、接岸できなくとも近くまで行って泳いだりボート

で陸にたどり着くことが可能だからです。しかし海はますます荒れ、嵐は船を沖のほうに吹きやりました。とうとう陸も見えなくなりました。

そこで人々は神に呼ばわって許しを請い、口々に船長の決断を求めました。

船長は、着ていたコートを引き裂き、ヨナの肩を後ろから両手でつかんで、荒れ狂う天空を見上げて言った、「この人ヨナの神様、どうぞこの人のせいで私たちの命まで奪わないで下さい。私たちはこの人をあなたが造られたという海に投げ入れます。でもそれはあなたがさせることだからです。だから私たちとしては仕方のないことです。この人をあなたの手に任せます。どうか私たちは助けてください。」

こう言うと、船長はヨナを前に突き出し、ヨナは海に飛び降りた。

間もなく、はるか彼方に弓なりの水平線が突如として明るく浮かび上がってき、黒い雲はそこからどんどん風に流されてゆき、荒れ狂っていた海は一変して巨大な青いじゅうたんを敷いたかのように平らになり静まった。人々は驚き、喜んで、ヨナの神を称（た）え、感謝し祈った。

「おー、ヨナがあそこにいるぞ！」舵手が右手を伸ばしてヨナが飛び降りたのとは反対側の右舷の海域を指し示しました。

見ると遠くでヨナがプカプカと漂っています。船から投げ捨てられた人形使いの木箱からこぼれ出た木人形につかまっている。

「おーい、ヨナは無事だぞ、助けに行こう！」舵手

「(傍白) 助けるとまた嵐が戻ってきはしまいか？」各々

「ボートをすぐに下ろすんだ！」船長

「おーい、ヨナー、今助けに行くからがんばってろよー」水夫長

ヨナからは声が返ってこない。

ボートに船長が真っ先に乗り込み、体格のいい二人の船員が続いた。三人はヨナの方に

めがけてボートを一心に漕いだ。そして石を投げたら届きそうなところまで来たときのこと、

「あっ！ 船長、何か大きなものがやってきます！ 気を付けてください！」 マストに上った船員が指さしながら叫んだ。

みるとヨナのかなたに浮き沈みしながら勢いよく近づいてくるものが見えます。

「なっ、なんならー?!」 材木商人

「あの大きな波、灰色の見えるぞ！」 料理長

「ものすごい速さでやってくるぞ！」 占星術者

「船長、気をつけてください！」 舵手

ボートの三人は振り向いて船員や船客が指差すほうを見た。大きな白いうねりが上下しながら近づいてくる。

「あれはダイオウイカだ！ 白い」 人形使い

「いや、あれは鯨だ」 占星術者

「あっ、口を開いた。ヨナが食べられるぞ！」 料理長

「やられたー！ ひとのみだ！」 賭博師

「あっ、潮を吹いたぞ！ やはり鯨だ」 拝火教徒

「この野郎、これでも食らえ！」 立ち上がった船長は、こう叫びながらボートにあった長い鉤竿（かぎざお）を投げつけた。それは弧を描き、巨大な海獣の大きなひたいをかすり、その白い皮膚に赤い筋をにじませた。

それに立腹したせいかどうか獣は大きく身をくねらせ、白い尾ひれでボートをすくい、宙高く放り上げた。三人は悲鳴をあげながら海中に落下し、しばらくは浮かんでこなかった。

転覆したボートのそばから三人が浮かび上がったとき、獣は虹色の潮を噴き上げ、泳ぎ去ろうとした。

「船長、大丈夫ですか?!」 船員ら

「やい、人喰い鯨め！」 船長がボートにつかまって叫んだ、「もしお前が神の使いだというのだったら、そのしるしを見せろ！」

白い鯨は片方の目で船長を一瞥すると静かな緑色の海面を分けて泳ぎ去っていった。

「あれが、彼の運命だったのだ、神に背いた預言者ヨナの。なんと恐ろしい！」 偽預言者が震える声で言う。「(傍白) しかしヨナよ、あなたは本当に神の声を聴いたのか? それでも逃げたのか?」

第2章

こうしてヨナは鯨に飲み込まれてしまった。幸い鯨は噛まないで流し込んだので怪我をすることなくその腹の中に入りました。しかしそこは真っ暗闇で、息苦しく、蒸し暑く、ひどく酸(す)い匂いがして、激しくせきこみ、吐きもしました。ただ、なぜか窒息することはなかった。たくさんの海生動物が九死に一生を得ようと必死にうごめいており、彼の服に入り込んでくるもの、足や腕や顔の皮膚に吸盤で張り付いてくるものが出て、ヨナは悲鳴を上げ、もがき、何かに足指をかまれた時には蹴飛ばしてむずがる子供のよう泣き叫んで、あばれまくりました。もう生きた心地がしません。

やがてせきに妨げられながらもヨナは神に必死になって声を張り上げて助けを求めました。しかし酸性の空気が彼ののどを痛めつける。のどが渇き、ついに声が枯れて音が出なくなった。ヨナは口ばくでまだ何かを言おうとしている。突然耳鳴りが始まった。すると多くの思い出が次から次へ彼の脳裏を駆け巡り始め、やがて長い間記憶から失われていた幼年期の思い出が今現実に起こっていることかのような鮮明さでよみがえってきた。彼は苦痛をじっとこらえて幼年期のシーンを追った。あるシーンで彼は両親に連れられて神殿に来て、その荘厳さに目をうばわれている。母がいけにえのための小さな鳩

を一羽彼に持たせてくれる。それは飛べないように羽がしばられていた。彼はそれが殺されるのがかわいそうではなそうとしない。ついにその鳩は祭司に奪われ、首がもぎ取られ血が抜かれ丸焼きにされる。幼いヨナはしばらくあっけにとられて見ていたが、堰を切ったように大声を立てて泣きじゃくる。両親は笑い、父は彼を抱き上げ、接吻し、肩車してあやしてくれる。背の高い父の肩の上にいるといつも誇らしい気持ちになる。「アミタイさん、かしこそうな顔した息子さんじゃのう」だれかが言う、と父は大声で笑いながら「顔だけですよ。本当にかしこいかどうかどうでしょう」と言う。次のシーンでは少年ヨナがかけっこで先頭を切って走っている。ゴールの向こうで彼の父母がうれしそうに応援している。次の瞬間にめぐり来たのは彼の両親が家の中で二人の掠奪者にこん棒で殴り殺されるシーンだった。「お母さん！」少年ヨナが叫んで失神する・・・「お母さん！」預言者ヨナも叫ぶ、が、のどに鋭い痛みが走っただけで声にならない。と、トビウオが飛んで彼の顔面を打ち、ヨナは失神、そして夢の中で声を聞いた。

「ヨナ、あんたもお神（おかみ）に背（そむ）いたとね。おれもやけん。」それは快活で若々しいテノール声だった。「おりゃあんたを飲みとうはなかったとよ。あんたらサル系は骨ばっていて肉も筋（すじ）が多くて硬くてまずくて消化にもよくなか、しまいには便秘もすつとよ。おかげでこの若さで黒便が出たこともあると。おれらマッコウクジラは元来小魚やエビなどの群れを食って育ててきちよる。いくら図体（ずうたい）が大きいからって大きなものはあんまり好（す）いとらんとよ。見ててわかったと思うが、歯も下あごのほうにしかついとらんと。だからたいていのもんは丸呑みすつとよね。まあダイオウイカはけっこう食うよ、でもあれらはあんたら陸（おか）もんと違って柔らかくて実（じつ）はとてもスリムなんだ。つるつとのどを通る。そげんこつで、お神からあんたを丸呑みにしてこいと言われたときには、まっぴらごめん、とこの地中海から逃げ出して、お神の目の届かないところに行こうとしたとよ。

「ばってん、このざまよね。水門を出たとたんに真っ白にされてしまったと・・・それをどうして知ったかって？ そりゃおれにくっついてるコバンザメたちが、びっくらこいて教えてくれたとよね。「これじゃあ、おれたち目立って仕方ねえ」ってね。それからの難儀ときたらないね。まずご婦人方が寄って来なくなったね。こう見えてもそれまではいやというほど別嬪（べっぴん）が寄り添ってきて、時には寝る暇もないくらい忙しかった。『ちょいと、あたしゃおまいさんだけが頼りなんだから、ほかの女と浮気なんぞしちゃいやよ』なんて耳元でささやいてあっちをつねっていた面々が、おれが白くなったとたんに、『ありゃ神様だ、おおこわ』なんて勝手にさわいで、寄り付かなくなったとよ。まあそんなことはいい、嫉妬深いご婦人方にあれやこれや嫌気のするような叱責や小言を言われてうんざりして過ごすよりは、気の置けないコバンザメたちとのんびり過ごしているほうがよっぽどよか。あれらはね・・・ま、あれらの名誉のために言っておくと、おれにくっついてただ只乗りしちよるだけじゃないとよ。おれの体に付く寄生虫なんぞの有害なものを食ったりして取ってくれ、念入りにスキンケアをし、毛づくろいもして

くれ、おまけにおれが寝ているときには見張り番をしてくれる、そしてなんといっても熱心な話の聞き手であることがうれしいね。ご存知のように、おれたちマッコウクジラは、お神がこしらえたすべての生き物のうちでも一番大きな脳を持ちよるちゃが。だから必然的におれたちは最も優れた思考家であって、毎日飽くことなく思索にふけり、偉大な思想や発明をいくつも作り出しちよるとよ。だけどせっかく作り出しても自分の中に閉じ込めておくのはもったいないばい。そこでこれを世の中に広めるためには聞き手が必要なんだ。しかしほとんどの生き物は我々の高尚な哲学や科学や純粋文学には興味を持たないんだな。尾ひれがついて面白おかしくなったゴシップや荒唐無稽で矛盾だらけの作り話に興をそそられて、真実を見つめようとはしない。ところがコバンザメたちはちがうね。あれらは、名前に恥じず、値打ちのあるものと無いものとの違いが分かるんだ。だからおれたちの話にはめっぽう愛着を抱いて離れようとしな。なかんずく、今おれがあんたに話しちよるようなノンフィクション物語には貪欲で、こちらがもう話すネタがなくなるまでおねだりしてくるとよ。一説によると、コバンザメに吸盤ができたのは、話を一言も聞き漏らさないようにとの熱心さのあまりおれたちクジラのからだに耳を一時も離さず押し当ててる姿がお神の心を動かしての結果だというのだ。つまりあれはコバンザメの耳が進化したものらしいんだ。そういえば、おれたちだって呼吸しやすいようにと鼻を頭のとっぺんにもってってもらったんだ。

「さて、話をもどすと、こう白くなってしまったらおれは敵どもにおいでおいでをしちよるようなもの。北極や南極・・・と言ってもあんたにはわからんやろうが・・・まあ雪と氷に囲まれたところにいる分には白は保護色として役に立つが、ここじゃ大変なハンディだ。天敵がおれをすぐ見つけてわんさとやってくるようになったとよ。初めはカモメが一羽二羽とやってきて、とがったくちばしでつつきやがる。カキや貝類をあさっている間はいいが、味を覚えたやつらはおれらの皮膚を破って肉まで食う。痛いものって、背中が傷だらけでこぼこ、子供の鯨はそれで死ぬことだってあるほどあくどいとよ。それでしょっちゅう潜らざるをえないので、ゆっくり好きな日光浴ができなくなったと。目玉をつつかれたら、おしまいだから昼寝もできやしない。

「だけどほんとに危ないのはシャチだね。あいつらは狡猾で、チームプレイに長(た)けていて、いろんな技を心得ているんだ。例えば、獯猛なサメでもやつらのひねり技でくるとひっくり返されると、動けなくなってやつつけられてしまう。また、クジラ族にとって浅瀬や洲に乗りあげてしまうともうこれは死を意味するんだが、シャチは唯一の例外だ。若いころから練習を積んでいて、波打ち際にアザラシなどがいたら、波に隠れて近づき、いきなり岸に上がってきて餌食をくわえて深みに戻っていける術を心得ている。流氷に乗っていたホッキョクグマを餌食にしたという報告もある。殺し屋クジラと呼ばれているゆえんよね。

「さて、チームプレイに長けているといっても、5匹くらいなら尾ひれで打ちのめしてやる。しかし、それ以上なら逃げるの一手だ。こないだ10匹できおったと。最初、うしろから5匹きているなど気づいて、しっぽで痛い目に合わせてやろうとわざとのろのろ泳いでいると、前で5匹が待ち伏せしてやがった。これもパトロール役のコバンザメが教えてくれたと。あれらは本当に名前負けしない役に立つ連中たい。それにひきかえシャチはげす野郎どもたい。やはりこちらが白くて目立つから、彼らに作戦を立てやすくさせたのだろう。やつらは散らばっておれを囲もうとしてきたので、急いでもぐった。やつらはおれらより三倍以上泳ぐのが速いからここはもぐるの一手だ。幸いやつらは深くはもぐれないんだ。たいてい300メートルくらいであきらめる。だからそれまでの勝負だ。おれは1100メートルはいける。いところで、3000メートルいったのがある。そのへんでは生き物たちは光を放つので、明るい星空を見ているようだって、流れ星よろしく走るのもいてさ。

「さて、おれは必死でもぐったが、一匹がついに尾ひれに噛み付いた。おれは体を二つに折ってから、勢いよくばねをきかせて尾ひれをフルスウィングした。これで気絶しないやつはたいしたもんだが、こいつもやはり気絶したらしく、ふっ飛んでいった。これができるのは一匹までで、二匹に同時に噛み付かれたら、さすがのおれも振り切れず、負けてしまう。それでおれは必死で逃げたさ。そして水深200メートルくらいからはおれに有利な生理現象が起きるんだ。そのあたりはもう水温がえっと低くなり、おまけに水圧が高くなるので、おれのからだ、特に柔らかい大きなおでこがぎゅっと圧縮されて流線型になって固まるんだ。で250メートルくらいの深さでは体積が減るおかげで浮力が体重に比べて相当小さくなり、泳ぎをスピードアップできるんさ。そうなったらもうこっちのもん、こうしていつものように逃げ切れた。しかし上では、やつらは相当長い間待ち伏せしていて、こちらがもういいかと思って上がっていくと、今度は息継ぎをさせまいと交代で上から体当たりをしてきて、おぼれさせられるんだ。だからしばらくは上にはいけない。ま、おれたちは2時間くらいなら平気でもぐっていられるんだ。もぐる前に深呼吸を十分繰り返しておれば、3時間近く辛抱できる。いずれにしても楽に上昇するためには、体を膨（ふく）らませて浮力を回復させなくてはならないのですぐ上に戻ることはよっぽどの理由がないとしない。さて必死でもぐった運動のせいで体内温度が上昇し血の巡りもよくなっているからおでこからゆっくり解凍され膨（ふく）らみ始めるんだが、温泉に行けば手っ取り早くできる。それにおれは大の温泉マニアなんだ。温泉を見つけるのはたいして難しくない。たいてい泡が出ていて、遠くなければその音を聞き分けることができる。小さな谷間に手頃の大きさのを見つけたんで降りて行って岩々（いわ）の間に体を休めたとよ。勢いよく湧き出る泡と湯はからだをマッサージしてくれてとても気持ちよか。冷えたからだを芯まで温めてくれる。体を回してカモメとシャチから受けた傷口を丁寧に湧き湯と泡に当ててやった。こうすると傷口が消毒され、早めに治癒するとよ。そうしているうちに、いつものようにうつらうつらしてきて眠ったとよ。

「いつもなら安眠を妨げられることはないのだが、今回は事情が違っていた。大蛸（おおだこ）に見つけられたわけよね。白くなけりゃ簡単には薄暗い中で見つけられないんだが、なんせこっちは雪のように白くて、海の中にや雪などあるはずがないから、やっこさんすぐにえものだとわかる。たこは特に白いものに食欲をかき立てられるそうなんだ。そいで抱きついてくる。これがやばいとよ。あいつらの足に抱きつかれたひには身の破壊さ。どんなにもがいてもだんだんきつく、しかもらせん状にねじるように締めてくるんだ。だから魚やサメはそれで気絶してしまう。それでもものたうっているとやがて唾液を皮膚に流し込まれ、それが麻酔の作用があるから次第に感覚がなくなって気持ちよくなっていく。そしてあの硬い口ばしで少しずつ食われていくとよ。痛くないからこちらはあばれないんだ。やっこさんゆっくり味わいながら食事ができるわけだ。これでおれもいよいよ一巻の終わりかと思ったとよね。しかしよくよく見るとこのたこは足が少ないんだ。どげんしたとね、と聞いてみると、自分をのしりながら言ったと、『腹あ減っちゃまって自分で半分食っちゃまっただ。なさけねえ！』つまりこのたこの八ちゃんは、実は四ちゃん（よっちゃん）だったわけだ、ははは。これならおれだってなんとかなんとかなると気合を入れて岩にこのたこ坊主をこすりつけながら猛烈にあばれてダッシュしたとよね。するとまんまと足がゆるんで外れたと。逃げていると、うしろから『やい、逃げるのはいいが、わしのその大切な足をおいていけ！』と四ちゃん（よっちゃん）はいきまいたが、おれは振り返らず、ちぎれておれの腹にまるでコバンザメのようにへばりついてのたくっているたこ足一本を、こりゃあ上で待っているコバンザメらにいいお土産（みやげ）ができたわい、それに次の冒険物語が真実であることの証拠ともなる、と付けたままおさらばしたね。聞くところによると、たこの足はまた生えてくるそうだから、三っちゃん（みっちゃん）もそのうちまた八ちゃんにもどるんさ。

「さあ、さすがのおれもこれで回心したとよ。お神に背（そむ）いてよかことはいっちょんなか。内海（うつみ）に急いで戻って、言われたとおりのまいさんを飲み込むためにこっちにやってきて、そいでごらんとおりの飲み込んださ。でももう後悔さ。案の定、胃がもたれるわ、胸はむかつくわ、はきけはするわ、言わないこっちゃんい、はじめからお神にはそぎゃん言っとたとにね！

「え、どうして自分はクジラの胃の中で窒息しないのかって？ その説明は簡単だが、あんたに理解できるかな？・・・ま、せっかくだから頭を振り絞ってできるだけわかりやすくかみくだいて話してあげよう。まず、我々の胃は四つの部屋がつながってできるとよ。今あんたがいるのは一番前の前胃（ぜんい）というもので、ほかのよりずっと大きい。ここでは消化液はほとんど出ない。だからそこにいる限りあんたは消化されないんだ。漬物みたいにはなるけどね。・・・あ、そうだ、あんたの周りには小魚や海藻はもううまい具合に漬かってきているころだから、よかったらどうぞご自由にお召し上がり。それから注意しておくけど、さっきみたいにもがいたりあばれたりすると、すべっ

て隣の第二胃に引き込まれて、あっというまにゼリーになってしまうから、ご用心。

「さて、話をもどすと、この前胃は大きいのが骨ばった獲物（えもの）を粉碎して消化しやすくするためのものなんだ。もちろん今はあんたを預かっているから粉碎運動はしていないが、したら、ここで獲物は皆殺しになる。こうしてサメなどの危険な獲物が体内を害することを防ぐ目的もあるんだ。

「さて、ご存知のように、われわれマッコウクジラはいろんな理由で長時間深海にもぐることができ、そのため酸素をできるだけたくさん体内に取り込む必要があるんだ。それで肺の機能が高度に発達していて、吸い込んだ空気中の酸素のうち80から90パーセントを血液に取り込むことができるようになってる。これはあんたらの10から15パーセントに比べてもわかるようにけたはずれに優れている。だからいわば酸素の食いだめができるんだ。それでわれわれクジラは深海に長く潜るときは何回も深呼吸をしてから行くんだ。また海中で浮力を下げるために体積を減らすべく我々のからだは収縮しやすくできているんだ。すでに述べたおでこがその例で、ほかには例えば肋骨が柔軟なので水圧を受けると胸がへこみ肺が圧縮されて細くなるようになってるんだ。この体積の縮小に応じて新陳代謝が減速し、同時に心拍数も二分の一になり、酸素が消費されるスピードが低くなる。またできるだけ多くの酸素を体内に保持すべく、酸素を貯蔵する役割を果たすミオグロビンが他の動物に比べてかなり濃密に筋肉等の細胞内に存在している。さらに我々の血液は酸素を運搬するヘモグロビンを内蔵する赤血球も過密に存在しているんだ。つまり動脈においては酸素が一時的に過飽和の状態では血液中に存在しているんだ。そして長い時間潜っていて血液中の酸素の濃度がある程度低下してくると、血液は、機能が停止すると生命の存続にかかわるようなより重要な器官に優先的に送られるようになり、そのため、そのような器官は他の部分より長く酸素濃度を高く保つことができるんだ。そしてあんたのいる前胃には最も優先的に血液が送られるんだ。脳よりも優先されちよとよ。その理由は、おれたちは、例えば敵に襲われたときに、生まれてまだ間もないクジラの子を一時的に前胃に飲み込み、戦いが終わるまで保護するんだ。で、窒息させないために前胃の中に酸素を発生させるべく血液を送り続けるようになってるんだ。だからたとえ親が脳死状態になっても心臓が動いている限りは前胃には少しづつだけ酸素が供給され続けるんだ。だから子は親が死んでも酸素がなくなるぎりぎりまでその体内に潜（ひそ）んでいれるので、生存できる確率が高くなるわけだ。ちなみに餌をとるために深く潜るときも、胃に入れるんだ。そして餌を飲み込んだら子供がそれを食べるという一石二鳥ということになる。そういう時には、子供に危険の少ない小型のイカ類を選んで飲み込んでやる。というわけで前胃には血液が最優先で送られるんだ。その血液が胃壁の粘膜を介して弱酸である胃酸と二酸化炭素とに接触するときに、過飽和状態で存在していた過分の酸素が分離し粘膜を通して発生するといわれているんだ。こうして前胃の中の雰囲気は長時間にわたり所定の低レベルの酸素濃度を維持するんだ。まあそのへんのところの化学反応は完全には解明されていないが、とにかく

そんなあんばいで、あんたも窒息しないでいられるんさ。・・・あうっ、いけね、また吐き気がしてきた。いわんこっちゃない。このままじゃ目的地に着くまでにあんたを吐いてしまえばいい。兄弟、なんかよか胃ぐすりもってなか？ あったら少し分けてくれんね」

などとヨナは夢の中で声を聞いた。この声は延々と続くのですが、それを全部しまいまで書いてみると、ヨナと同じようにこの物語もこの鯨に飲み込まれてしまい、クジラ物語に変わってしまいそうです。ちょうど切りがいいのでここで切り上げて本題のヨナ物語に戻りましょう。なおこの声は、夢の中でヨナが聞いたものですから言うまでもなくその内容の信憑（しんぴょう）性は不確かであり、読者の皆さんがこれを鵜呑みされると、かえって鯨飲されかねませんのでご注意ください。

さて目が覚めるとヨナは鯨に飲み込まれたのまでは夢でなかったのを知り、心を痛めません。しかしその心にはいくぶん平和が戻っていました。暗闇の中では自分がどのくらい眠っていたのか、もちろんわからない。ただ、うごめく魚類や軟体動物のうち化学反応により燐光を放ち始めたのがあちこちにおいて、その光でうっすらと周りの様子が見えるようになっていました。彼はより動物らにまどわりつかれないところを見つけそちらに移動し、再び口ばくで祈り始めた。

ヨナが鯨に飲み込まれて三日の後、神はヨナの祈りを聞き、鯨に大いなる吐き気をもよおさせた。それで鯨はまだ胃に残っていたものをいっきに吐き出した。こうしてヨナは他のルームメイトたちと一緒に鯨の口から海に吐き出された。

ヨナは泳ぎを知らないので溺れると思った。しかし一瞬のうちに彼の体は温かい空気を感じつつ柔らかい地面に落ちた。あまりにも長く暗闇において、突然陽光のまぶしさの中に吐き出されたので彼はしばらくは目を開けられないでいた。それで何が起こったのかわからない。顔にかかった海藻を取り除いて薄目を開けてあたりを見ると、なんと彼は二つの高くそびえるエメラルド色をした透明の水壁のあいだにいた。両壁の向こうには幾他の海生動物が泳いでいる。彼が横たわっているのはこの二つの壁のあいだを延びる砂地の通路で、それは緩やかな上り坂になっており、その果てには砂浜と緑の草地とが垣間見えた。上を見るとこれらの平行な壁の上縁に挟まれた雲一つない細い青空がくっきりとして延びている。砂地の通路には幾多の魚たちがびんびん飛び跳ねている。ヨナは、海が二つに分けられているのだ、これはかのモーセの海底の道に似ている、と思った。しかし振り返るとその砂の通路は自分のいるところの数歩先で終点になっている。

その壁の高さはキリンの高さの2倍半くらいもあろう、と思ったのもつかの間、右手

の水壁の向こうにいた魚の大群がまるで舞台の幕が左右に引かれたかのように整然と分かれていくのを見た。そしてその向こうに、ヨナは全速力で自分のほうに接近して来る巨大な白鯨を見て思わず身構えた。身震いがしてきた。もう飲まれたくはないぞ！と思った。見る見るうちにヨナの斜め頭上に来た白鯨は勢いよく水壁を破り出で、一瞬神々しい全身を宙に浮かせたかと思うと反対側の水壁に突入した。すると二つの水壁は、破られた巨大な穴から海水を激しく放ち始め、すぐにヨナのいるところは水浸しになった。あわてて彼は立ち上がり、一目散に浜を目指してかけた。海藻が彼の裸足（らそく）に絡み、柔らかい砂地に足をとられ思うように走れない。水生動物や岩を避けて走ったが、ついに彼はクラゲを踏み滑って倒れた。滑ったほうの左足がつって起き上がれない。後ろを見ると水壁の間を大きな波が勢いよく押し寄せてくる。もうこれでおしまいだと思った。しかしその時、彼が通り過ぎてきた岩のひとつが動いているのに気づいた。よく見るとそれは岩でなく大きなウミガメがあおむけになって砂の上に転がっているのであって、何とか起き上がろうと四本の足と頭とそれに尻尾とでもがいているのであった。ヨナはすかさずそこまではってゆき、力をふりしぼってこれを起こしその大きな甲羅にきつく抱きついた。すると押し寄せてきた大きな波が彼らを飲み込み彼らを回転させた。ヨナは甲羅をつかむ手を緩めなかった。ついにウミガメはヨナを乗せたまま泳いで浮上し、押し寄せる波々（なみ）はこんどは彼らを波頭に持ち上げ、砂浜に投げ落とした。

ヨナはたくさん海水を飲んだが無事だった。海を見ると先ほどまであった海中の通路はあとかたもなくなっていた。白鯨ももう姿を現さない。

遠くで少女たちの笑い声や叫び声が聞こえていた。見ると彼女らは、近くの小さな川の向こう側の浜でボール遊びを楽しんでいるのであった。ヨナはのどの渇きをいやすためにそのきらきらと海に流れ出ている浅い小川に入り水を飲んでみた。しかし潮が満ちている時だったので、塩分が強すぎた。左足のつりはもうとれてしたが、空腹、のどの渇き、それに疲労でくたくたになっており、川上のほうに歩いていく体力はもうなかった。少女たちに助けを求めようと思った。するとボールが勢いよく小川のほうに転がってきていた。ヨナは急いで駆け寄り、小川に落ちる寸前にそのボールを捕らえた。川から出てこれを蹴り返したが、半分も届かなかった。彼はよろけて膝を砂地に落とし、手を振って助けを求めた。しかしヨナが裸同然の姿だったので少女たちはだれも近づいてこなかった。ヨナはしきりに両手で水を飲むそぶりをしてみせた。

やがて、一人の少女がうつむいたまま歩いてきて、ボールを両手で拾い、次にヨナの眼を見つめ、あごである大きな岩を指し示して言った、「おじさん、もしあの岩の後ろにいてくだされば、私たち水と食べ物を持ってきてあげましょう。」ヨナは彼女の気高い態度に驚き、すぐにその言葉に従った。

すると少女たちはヨナの隠れた岩のほうに食べ物、水、そして乾きかけの服を持ってやってきた。彼女らは小川の川口で洗濯をするために来ていたのです。一人の少女が岩越しにその服をヨナの頭に落ちるように投げ、それがうまく命中すると、みんなは拍手し笑いながら舞った。ヨナは急いでその服を着た。すると少女たちはヨナの高貴な姿に感嘆した。

ヨナが与えられたものを飲食するあいだ少女たちは口々に彼に問いかけた、「おじさん、どこからこられたの?」「どうやってきたの?」「どんなお仕事をされてるの?」「まだ独身?」「どちらへ行こうとされているの?」「今夜はどこに泊まるの?」等々。しかしヨナはまだのどが回復しておらず聞き取れるような声が出せなかった。すると風向きが変わり、ヨナが風上になると、最初の少女以外の者たちは皆笑いながら飛び跳ねてあたりに散らばった。ヨナのにおいがそれほど臭かったのだ。ヨナは残った彼女に感謝し、神にも感謝の祈りを捧げた。

こうしてヨナの逃避行は失敗に終わった。

第3章

神はまたヨナに語りかけました。「ニネベに行きなさい。そして人々に罪を悔い改めるように諭(さと)しなさい。もしお前が40日以内に説得しえなかったらニネベのものは皆罪のため滅びる。」

ヨナは今度はすぐにニネベに向けて出発しました。

前にも述べたように、ニネベはとても大きな町で、その端から端まで行くには歩いて三日もかかるほどでしたので、町じゅうをくまなく預言して歩くのは尋常なことではありません。すべての道を歩きつくすにはたしかに40日はゆうにかかったことでしょう。ヨナは勇気を出してニネベの町に入りました。そしてアッシリア語で暗記した次の言葉のみを繰り返し唱えました。

「みなさん、罪を悔い改めましょう。神を畏れて悪いことはやめましょう。もしみなさんが、今のままの罪多き生活をし続けたら、40日後には、この町は滅ぼされてしまいます」

もちろん40という数字は毎日1ずつ減っていきますので、彼はアッシリア語で40からのカウントダウンも言えるように学習していました。

ヨナは幼年期に体験したショックによるトラウマのため、ニネベの人々への強い恐怖心を抱いていました。自分には神がついているのだからいつも守られているのだ、と何度も自分に言い聞かせ勇気を固持しようとしたのですが、犬がこわい人が犬に近づかれると硬直するように、彼もニネベの人たちがそばに来るとおびえて何も言えなくなりました。彼らと目を合わせることもできません。初めの数日間は人々に遠巻きにうつむきかげんで話しかけるのがやっとでした。声も張りがありません。やがて子供たちが珍しがってやってきては、彼のかたことのアッシリア語を真似てひやかし、面白がりました。彼は子供たちの発音からニネベ方言での正しい言い方を覚え、子供たちのイントネーションをもとにメロディをつけ、自慢の声で歌い始めると子供たちはますます面白がり、いっしょに歌うのでした。そうしているうちに彼のトラウマも解けてきました。やがて人々の目を見ながら話すこともできるようになりました。しかしおとなは誰もヨナを相手にしませんでした。ヨナが勇気を出して近づこうとすると、「臭い！」と人々はヨナに唾を吐き掛け、近寄らせませんでした。ものを投げつける人もありました。もちろん家に招き入れる人もありませんでしたので、夜はいつも野宿でした。それでもヨナは神に命じられたとおりのことを人々に語り続けました。

ヨナがニネベに来てから34日が過ぎた。しかし、ヨナの警告に耳をかそうとする人はまだひとりもない。人々は相変わらず、神を恐れず、人をだまし、盗み、悪意を本意とした。よって自らをますます愛することができなくなり、他人への怒りがさらに強まるという悪循環を繰り返した。さて、ヨナと難破しかけた船に同乗していた材木商人がレバノン杉の商談でニネベ王に招かれていて、その日ニネベに着いた。すぐに宮殿に赴いて自らの到着を報告し、翌日王と会見することになった。指定された迎賓宿を探していると、ある方向に進む群衆に遭遇し、これについて行くと、神殿の境内に入った。そこではまさに男子を生贄（いけにえ）にする儀式が始まろうとしていた。

このとき材木商人に、荒れ狂う嵐の情景と、ひとときの平和、それに続いて神のニネベ警鐘の命に背いた預言者ヨナがクジラに飲み込まれるすさまじい光景が鮮明に蘇ってきた。そしてヨナが話した神のニネベ壊滅計画のことも思い出した。その時、男の子が死にも狂いで泣き叫び始めた。商人は、その子が覆面をした祭司らにより殺害され丸焼きにされるのを目の当たりにした。群衆は異様なうなり声をあげた。漂ってきた肉煙のにおいに商人は吐き気を覚え、ニネベが今にも神により滅ぼされるのではなかろうかと恐れた。そして向かい側の神殿の扉の上に立つやせた体にみすばらしい服を着た男が両のこぶしでしきりに自分の胸を打ち何やら泣き叫んでいるのに目をうばわれた。群衆の

何人かが「やい、乞食坊主、そこから降りろ！」などと叫んでいる。しかし商人はいきなり、「ヨナ殿！」と叫んだ。なぜなら彼にはそれは鯨に飲まれて死んだと思っていた預言者ヨナに違いなかった。商人は、預言者のほうに行こうとした。しかし、立ち去ろうとする群衆の流れにはばまれ、そうこうしているうちに塀の上からヨナの姿は消えた。彼は思った、「ヨナの幽霊がここに来ている！ さてはニネベの壊滅を預言させるためにヨナの神が彼の幽霊をついにここに引き上げたまいしか！ ありやあ、わしゃあ呪われたもんよ！ 二度も同じ神の手中（しゅちゅう）におちいるとわ！」

商人は神殿の境内に残った男たちに、塀の上で泣き叫んでいた男のことを聞いた。彼らはその男が、ひと月くらい前から町にいるヨナという托鉢僧であり、施しを受けるために家々を回り罪の悔い改めとニネベの滅亡を預言し続けていること、そして他の托鉢僧と異なり、かなり魚臭く、いかなる神像をも拝まない者であることを話した。そこで商人は実は自分はヨナを知っていることを明かし、ヨナが鯨に飲み込まれるまでの一部終始を人々に語った。しかし信じてもらえず、特に鯨が白かったということを行ったことにより、かえってニネベの守護神である半魚神ダゴンを冒瀆するとして祭司たちにより監禁されそうになった。幸い王からの招待状を持っていたので罰金を払うだけでのがれることができた。

その夕、彼は宿の主人からヨナのいそうなところを聞き出し、探しに出た。夜警にも門番にも金を与えてヨナの居場所を聞き、町はずれにゆき、やっとのことで彼を探し当てた。ヨナは、岩を穿（うが）って作られたばかりの墓穴（はかあな）の中で祈っていた。商人は、自分がだれであるかを知らせ、彼にニネベが神に滅ぼされる前に一緒に逃げようと誘った。しかしヨナが断ったので、世の明けぬうちにひとり人知れず町を去っていった。

それからすぐに、ヨナが白い鯨から吐き出されたのだといううわさが広まり始めた。彼が臭いのはそのためで、顔色が妙なのは鯨の胃液で漂白されたのだと。そしてそのうわさのみなもとである材木商人が王との商談に入る前に、密かに夜逃げしたこともニネベの人々を不安がらせた。そうしてもしかしたらヨナは本当に神の預言者かもしれないぞと案ずるようになってきた。

罪を悔い改めるように、もしそうしないとニネベは滅ぼされる、と毎日同じことをたどたどしいアッシリア語で繰り返しながら、みすぼらしい格好で町をくまなく歩く異邦人ヨナの姿を見て、人々はだんだん不気味な気持ちになってきました。自分たちの悪行・罪を重々自覚しているのでますます得心（とくしん）できるのです。ヨナの履き物はぼろぼろになって、足の爪は内出血のため赤黒くなっていました。ヨナは初めは大きな声と大きな身振りで預言していましたが、やがて声はつぶれ、身振りも弱々しく

なり、ついには近くでかろうじて聞き取れるくらいのかすれ声となり、歩みも杖を突かないとできないようになりました。

人々の間で罪の悔い改めが始まったのは、そんなヨナの声がとうとう出なくなり、ただ口をばくばくさせるだけになったときのことです。長らくヨナの様子をそばで見っていたひとりの男が、まるで人形腹話術師のように、ヨナの口の動きに合わせて、ヨナがそれまで繰り返し言っていたことを、初めは小さく、やがて大きな声で言い出したのです、「みなさん、罪を悔い改めましょう」と。

それからというもの、罪を悔い改める人がひとりふたりと増えていき、その人たちもヨナについて歩き、「みなさん、罪を悔い改めよう」とヨナの声となって訴え始めました。そして、38日目には町中が罪を悔い改めようと言う声でみなぎりしました。断食をする人、灰をかぶる者、祈る人たち、それを取り囲む人混み、この様子が町のどこにでも見られるようになりました。悪いことをするのを見つけられた人たちはすぐに人々に取り囲まれ、悔い改めるように諭（さと）されました。あちこちで偶像神が倒され焼かれた。また、子供を生け贄にする儀式も人々によって妨害に合い、儀式を司っていた祭司長こそ生け贄にされそうになったので、彼は命からがら逃亡しました。

この実状はすぐにニネベの王の耳にも届きました。人々が悪行をやめるようになることは王家にとってはもとより好都合でした。しかしじきに人々は王も罪を悔い改めるようにと要求して宮殿に押し寄せて来ました。たくさんのプラカードが門に集められました。もし王が民衆の前で罪を悔い改めなければ、今にも暴動を起こして宮殿に乱入してしまいそうな勢いでした。ニネベ王は身の危険を感じ、すぐに人々に自らも罪を悔い改めようと言いました。そして群衆の前で、王服を脱ぎ捨て、灰をかぶりました。大臣や貴族そして宮殿の召使いたちも皆王に習って悔い改めをし、衣服を焼き、その灰をかぶり、祈りました。

39日目の朝、ニネベ王は、ニネベ中に断食、そして水も飲まないようにというお触れを出しました。さらに続けて、40日目には、灰をかぶり声を上げて神に許しを請うように、今後一切悪は行わないと神に誓いをたてるようにと命じました。

人々はそれに従い、いよいよ40日目には町中は神に対する祈りの声と、神を称える音曲で満たされました。そしてその運命の日、ニネベで誰ひとりとして神から罰を受けることなく、平和に過ぎていきました。ヨナは神の命令を全うしたのです。そしてその日、いつしかヨナの身体から鯨の臭いが消えており、彼の顔の漂白された部分は赤みを

取り戻し始めていました。

人々はこの運命の日に自分たちが無事とわかると、ヨナのところに集まり、始めはうやうやしく近づいて平伏（へいふく）するのですが、彼が臭くなくなっているのを知ると、足もとで平伏する人、洗髪してあげる人、香油で洗足してあげる人、新しい履き物を差し上げる人、さらには立派な衣服に着替えさせる人もありました。

日没に断食の命令が解かれると、人々は祝杯を挙げ、やがてお祭り騒ぎになりました。ヨナにも酒や肉料理が与えられ、立派な月桂冠が頭にかぶせられました。

やがて宮殿から使者が来て、王が預言者ヨナの労をねぎらい感謝の意を表したいので宮殿に来られたいとの招聘（しょうへい）を伝えた。すぐにたいまつ行列ができ、「くじらから復活したヨナ！ 神のみつかいヨナ！」という合唱が始まりました。人々はヨナをロバに乗せて行列の真ん中を行かせ、宮殿のほうに進みました。彼を祭司長にするよう王に請願しようとの声が上がると、こんどは「新しい祭司長ヨナ、くじらのはらからヨナ、バンザイ！」という合唱になり、笛や太鼓が鳴り響き、それに合わせて踊りも始まりました。

しかし、ヨナはその時、言いしれぬ寂しさと虚しさに胸が締め付けられていました。

ヨナは思った。

「私は、しかしこの40日の間、ニネベのこの人々が救われることを本心から望んでいただろうか？ 否、自分はただ神を畏れ、神の命令に忠実であらうとただけではないか。それも神から逃げられぬとわかったからだ。私がニネベの人々を愛していたかという、答えは否だ。私はニネベの人たちを愛せない。父も母も彼らの手によって殺されたことを一時も忘れることができなかった。私が臭いので彼らが近づいてくれなかったのをむしろ好ましいことと思っていた。ただ、40日間に限って神の命令に忠実であらうとただけなのだ。いってみれば自分は神に操（あやつ）られた人形に過ぎなかった。ニネベの人々が滅びようが生かされようが、私にはどちらでもよかった。ただ、神が私を操られるとおりに踊りしゃべる有能な人形であればそれでよかった。

「私が神を愛しているかという、それは間違いないことだ。あの鯨のはらわたの中でのたうち回りながら祈りに祈った私に答えて救い出して下さった神に感謝し、神の御心

(みこころ)に自分のすべてを賭けようとしたのだから。それでいてこの虚しさ、淋しさは何だろう。この人たちが味わっている今の喜びを共に味わうことのできない私はやはり人形だ。劇が終わって観客の喝采を受けて、舞台上で丁寧にお辞儀をする人形だ、そのお辞儀さえもただ操り糸が一瞬ゆるむので頭を前倒しているだけだ。心はそこにはない。だからこのニネベの人たちの歓喜の音が私を少しも喜ばせないのは当たり前のことだ。神よ、あなたから逃げようとしていた私はまだ人間だった。しかしニネベに来た私は人形になっていた。そうだ、あの時一緒に鯨に飲み込まれたあの木人形といっしょだ。あれは鯨のはらわたの中でも、うごめく動物たちにもまれて愉快そうに踊りまくっていた。

「神様、あなたは私を用いてこの邪悪なニネベを救われました。それも40日間も彼らに悔い改めの猶予を与えられたのです。でもニネベの略奪者が私の町に攻め込んできて父と母を私の目の前で殺戮したとき、あなたは父と母を救おうとされなかった。一瞬のうちに彼らが父と母をたたき殺すのを許された。それなのに私をニネベの救いに用いられた。私にはあなたのなされることがもうまったくわけがわかりません。

「私は、ニネベの人がひとりふたりと悔い改めていく姿を見て確かにうれしかった。しかしそれはニネベの人が救われると思ったからではなく、私があなたに喜ばれる仕事をすることができたという実感からくる喜びでした。そして自分にもできたのだという満足感でした。しかし、神様、あなたもご存じのように私の行為は愛の行為ではありませんでした。なぜなら私は今彼らが救われたことをむしろ残念がっているのですから。ニネベは救われる資格なんてなかったはずなのに何で神様はニネベを救われたのだ、と。」

やがて行進が宮殿に近づくにつれ人々の合唱は言葉の統一を失い、叫び声となり、音楽もハーモニーがなくなり、踊りはリズムを失った。そして人々の声が高まるにつれヨナの寂しさは怒りに転じた。

「それにしても彼らの馬鹿騒ぎときたらしゃくにさわる。ああ神様、この人たちはなぜこんなにまで馬鹿騒ぎをしなくてはいけないのです。もっと静かにあなたに感謝すればいいのに・・・そうだ、これだ！この狂気だ！彼らが私の生まれ故郷を略奪したときのあの野蛮な勝ち鬨（どき）の騒ぎと同じだ！

「神様、やはり私が前にも申しましたように、この民は滅ぼすべきだったのです。あなたが今日救われたこの民は今にまたきちがいじみた悪行を繰り返す愚民に逆戻りしますよ。この人たちはもうあなたのことを忘れてしまっています。へたをするとこの私を神に仕立てかねません。ほら、聞きましたか、この人は私がニネベの祭司長になった暁には祭司

にしてくれと頼み始めている。やはり彼らの悔い改めは一時しのぎに過ぎません。いや、最初に悔い改めて私と一緒に歩いた一握りの人たちは、まことの人たちでしょう。しかし彼らはどこに行ったのでしょうか。あの人たちが喜ぶ姿を見たら、この私でも一緒に喜ぶたかもしれないのに・・・え、もしかしてあの人たちは！・・・

「神様、この人たちは私を祭司長にせんと、宮殿に向かっています。しかし、どっこい彼らは宮殿に入るやいなや、私を投げ捨て、王家の宝物を略奪し始めるでしょう。その証拠に、ほら、門の飾りを外してもう奪い合ってます。神よ、もうやめましょう。この民は生まれつきの悪人なのです。

「今からでも遅くはない、どうぞこの民を滅ぼして下さい。私は朝には町の外れに逃げておりますので。そうでなければいつそのことこの私を殺して下さい・・・あ、何という恐ろしいことを私は思っているのだ、神様お許し下さい・・・私はうわごとを並べ立てていたようです。」

するとヨナは、神の声を聞いた。「ヨナ、お前の怒りは正しいものであろうか？」

「神様、・・・正しくはないでしょう。でも私の怒りはどうしても抑えることのできないものです。私にはやはり父と母を殺したニネベを許すことができないのです。そしてそれが神様に仕える身の最たる不幸であることも知ってのことです」

『以下、旧約聖書「ヨナ伝」第4章5節－11節』

その後(のち) ヨナ町の東方(あがりかた)に出(いで)て腰を据(す)へる 自(みずか)らに益(えき)せむとて庵(いほり)をば結び その陰に座りて町の如何(いかん)を見守る しからば御神(おんかみ)エホバ 一本の瓢箪(ひょうたん)の木をよきによきと伸ばし賜へば ヨナの頭上に緑葉茂りて陽光をば遮(さえぎ)りたり よりてヨナ彼(か)の瓢箪を非常の喜びとて楽しむ

しかれど御神 翌日の明け方一条の毛虫に命じて瓢箪の木の葉を遍(あまね)く嘯(か)ませ賜へば彼(か)の瓢箪の木一葉も残さぬ裸木となりにけり

さて陽の出(いで)たる折しも御神東方より熱き風を呼び起こし賜へり 直光ヨナの頭(ず)を容赦なく射たれば意識朦朧(もうろう)となりてヨナ御神に祈願して曰く 我はもはや生きるに忍びず 死ぬこそ本望なり

されば御神 ヨナに問へり 汝(なんじ)は瓢箪にかこつけて死を望むほどに怒(いか)り
たるかや

ヨナの応(いら)えて言ふよう 然候(さんぞうろう) 死を望むほどに怒りて候ぞよ

かくしてエホバ神曰く あな有り難や 汝は自らが創作したるにあらざる瓢箪の木を死
ぬほどに惜しむとは 一夜にして育ちし瓢箪の一夜にして枯れるがごときを以て死ぬ
ると申すか 然(し)からば汝は我が心持ちを多少とも悟るべし 彼の大きいなる町ニ
ネベをよくよく見よ 善悪の分別能(あた)はざる民(たみ)十二万余ここに住み居り
加へておびただしき家畜在り これを遍(あまね)く創作せし余がこれを聞々(まま)惜
しみていかでか失笑をば招くべし

終わり

追記

『神の御子(みこ)を世に遣(つか)われしは世の裁き(さばき)のためにあらず、御子
によりて世を救わむとするがため也(なり)』

(新約聖書「ヨハネ伝」第3章17節)

長光一寛

2014-6-1st

英語版へ(english version at :)

<https://www.amazon.com/dp/B018YSYOLU>

預言者ヨナの物語

著 一床ひろし

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
